

志貴皇子 權 御歌一首

1418 石走る垂水の上のさわらびの萌え出づる春ににけるかも

【右注】

\* 志貴皇子…卷一に既出。日本書紀には「施基皇子」とも書く。天智天皇の皇子。母は「宮人」の一人で、越の道君の娘。すなわち越地方の豪族の娘で、采女と推定されている。志貴皇子の歌は万葉集に六首ある。

\* 權…字書に「歡」と同じとする。字義は、声に出してよろこび楽しむこと。ヨロコブと読み、意味が少しずつ異なる漢字は多い。「喜」は善いことを見聞して心によるこび機嫌がよいこと、また事に関係してそれを心によるこぶこと。「悦」は気に入つてよろこぶこと、「歡」は嬉しがつて声を出して躍り上がるようによろこぶこと、「欣」は悠々として融けうるおいよろこぶこと、「怡」は顔色ににこやかさが表われること（上田万年他編『大字典』講談社、1963）など。

【語釈】

\* 石走る…原文は「石激」。古くはイハソソクと訓んだが、賀茂真淵『萬葉考』が「石激イハバシル」と訓じ、沢瀉注釈はこの読みが正しいことを詳説している。ただし真淵はこれを冠辞（枕詞）とし、垂水すなわち水が走り流れる滝に冠らせた語と解釈する。

\* 垂水…原文は「垂見」。契沖はこれを地名とし、「垂水ハ津ノ国ナリ」（代匠記）という。また真淵も地名と解釈して、「たるみてふ山に、冬こもれりしわらひの春にあひもえづるに…」とする。しかし地名とすべき必然性はなく、一般的に滝を指すとするのがよい。

\* さわらび…源氏物語の巻の名にもなっている早蕨であるが、万葉集中にはほかに事例がない。「早蕨」とは書くがサは早いという意味ではない。「さ小牡鹿」「さ百合」などというサと同じ接頭語で軽く讚美する意。

\* なりにけるかも…ああ（春に）なったことだなあ。「かも」は感動を表わす助詞。

【総釈】

この歌は「ア段の開口音とラ行の音が多く、明るく音律的な調子を持つてゐる」（沢瀉・注釈）ので、歌意以上に嬉しさに満ちた気分させせる。今日通常、春になったことをよるこぶ歌とされるが、決して実景を見て歌ったものではないとの説がある。右注の「權」の字義を厳密にとれば、早蕨を見て嬉しく思ったのではなく、何か声を出して躍り上がるようなよろこびであり、「ああようやく待ちかねた春になったなあ」程度の感激ではない。そのために、志貴皇子に何か吉事があったとき詠んだ歌ではないかと考えられてきた。

垂水を地名とつた契沖は、天皇から摂津国の垂水に封戸（ふこ。土地の住民が出す租税の一部を自己の収入にできる）を賜つてよろこんだときに詠んだものかも知れないとする。この解釈は近代でも土屋・私注などが支持している。

中西・講談社文庫本は「新春の賀宴に祝意を述べる趣で題詠された歌」とする。新

春の賀宴で実景をふまえて歌われたものではないことは、旧暦であっても正月はまだ蕨が出るころではことから知れるだろう。そこで「祝意を述べる趣で題詠」したという解釈になる。「題詠」とは、ある題（テーマ）をもとに歌を詠むことであり、たとえば新春の祝意を題としてその時の体験や実景とは無関係に歌を作ることである。たとえばこの歌、新古今和歌集・巻一、春歌に「題しらず」として次のように載る。

### 32 岩そくたるみのうへの早蕨のもえ出づる春になりけるかな

「岩そくく」となっているのは、語釈でのべた通り古い写本でそう読まれてきたことによる。（末尾が「かな」となっているのは平安時代以降の一般的な感動の助詞による。）ここに「題しらず」とあるのは、題詠で和歌を詠むことが一般化した時代の反映である。志貴皇子の時代に題詠というのはふさわしくない。ただし、この後に次のような歌がある。

### 1422 うち靡く春来るらし山の際の遠き木末の咲きゆく見れば

これも暦の上で春が来たころとすれば、山の木々の梢はまだ花が咲く季節ではない。つまり実景としては矛盾がある点で、早蕨の歌と同じである。しかし、新春が賀すべきものであるからは、その到来を歌で先取りして〈予祝〉することは不自然ではない。これらの歌の表現はそのように読み取るべきではないかと思う。志貴皇子の歌は実景ではない。いうなれば「石走る垂水の上のさわらびの萌え出づる」が「春」をイメージとして説明している表現なのである。滝の上になっさきに出てくるワラビが実感させてくれるそのような春、ということである。

また、万葉の時代の季節を暦日だけで決めるべきではなく、はるか昔から「春」は草木が芽吹くころの季節を意味することばだったことを思えば、生活の上においてはワラビが萌え出て、木々の梢に花が咲くときが春なのであっただろう。「權」の字義にとらわれなければ、実景ではなくとも、自然の運行として春がきた喜びを歌った歌と見てもいいと思う。

なお、伊藤・积注は、この歌がもともとは巻一の末尾「寧樂宮」の84番、佐紀の宮において長皇子が志貴皇子と宴をしたときの一首、「84 秋さらば今も見ること妻恋ひに鹿鳴かむ山ぞ高野原の上」の次に置かれていたと推定している。